

消えた『ローマ字の巻』

佐藤 邦夫

寺田寅彦全集の特徴の一つは『ローマ字の巻』であった。旧版全集の『ローマ字の巻』は巻頭から巻末の解説まで全てローマ字で埋め尽くされている。今後、ローマ字書きの本として希少価値が出てくることだろう。

しかし、ローマ字文は邦字文（漢字仮名混じり文）に比べ読み難いことから、筆者はなかなか読み通す気が起きなかつた。それで、本当に暇になったら、自分で漢字仮名混じり文に直そうと考えていた。将来の定年後の楽しみにでもしよう、と考えた訳である。

ところが歳月は人を待たず、福岡の鴻江洋明氏がすでに漢字仮名混じり文に訳し『寺田寅彦「ローマ字の巻」編訳ほか』という本にしてしまわれた。（その初版が一九八七年出版なので、あるいは、思いついた時期は同じくらいだったかも知れないと密かに思っている。）先を越されたのだ。さらに驚いたのは岩波から「新版・寺田寅彦全集」が出たことである。第九巻『ローマ字の巻』（一九九七年）が邦字表記となり、これでローマ字書きの『ローマ字の巻』はなくなってしまった（消えた）。名ばかりになったのだ。

しかし、この方が断然読み易いので、誰しも考える

ことは同じだと思つたことであつた。

この邦字表記化にはローマ字の普及に尽力されている橋田（きつた）広国氏から苦情があつた。第九巻『ローマ字の巻』の「月報」の文章「Torahiko no Roomazi（寅彦のローマ字）」から抜粋する。（筆者の邦字表記も付す。）

「Kono Zensyuu ni noru de aroo ga —

• Sukina Mono

Itigo Kohi Hana Bizin

Hutokorode site Utyuu - Kenbutu.

• Itayane ni Arare tabasiru Oto ka tomo

kikaba kikarete omosiroki Oto.

no yooni Tango no Wakatigaki de hitotu - hitotu no

Kotoba o kitinto Insyoo ni nokosi nagara sikamo

nagareru Rizumu wa Roomazi de koso aziwaeru koto ga

dekiru.」（注：長音記号に代え、母音を重ねる表記とした）

「この全集に載るであろうが —

• 好きなもの

いちご コーヒー 花美人

懐手（ふところ） して 宇宙見物

• 板屋根に霰（あられ） たばしる音 かつとも

聴かば 聴かれて 面白き音

の ように 単語の 分かち書きで、一つ一つの言葉 を きちんと 印象に 残しながら しかも

流・れる・リ・ズ・ム・は・ローマ字でこそ味わえることが出来る。」…と言う。

たしかに、橋田氏の主張も頷けるところがある、と思う。

筆者は短歌・詩などに、単語の分かち書きによるローマ字書き独特の味わいがあるように思うのである。特にローマ字書きの詩「六月の晴れ」(*)を読むとそう感じる。

(なお、新版『ローマ字の巻』を邦字表記化されたのは寅彦研究者としても著名な故・山田一郎氏である。山田氏は、その巻の解説の最後を「寅彦に有名なローマ字の歌がある。」として、右記の「Sukina Mono…」の方の歌を掲げて結んでいる。歌なので五・七・五・七・七になっっていることに注意されたい。)

ローマ字の良さは漢字を使わない、漢字化を考える必要がない、したがって平易な文章になることである。「平易な文章」といえば、寅彦先生のお得意とするところである。

寅彦先生は全集の一卷に余るローマ字文を書いたが、その本当の理由は、タイプライターは本職の物理論文の執筆に不可欠であり上手に使いこなしたので、アルファベットで構成され、タイプライターで打てる、すなわちタイプライター向きのローマ字を好んだのではないかと思われる。

また、寅彦先生の字は(鬮頁目に見ても)達筆とは言えず、きれいに印字されるタイプライターを好んだと思われる。(なお、「板屋根に…」の歌はなんとタイプライターを

打つ音！を詠んだものなのである。それを知って驚いた。)なお、橋田氏らは邦字表記化に対して、何よりもローマ字表現の否定の道につながることを懸念されたようだ。この点について、読み易さが優先される現在の状況であることは、何とも致し方ないと思うのである。

ただし、筆者が書いているこの文は、パソコンで「ひらがな」を「ローマ字」で入力した上で、さらに漢字やカナなどに変換をしているのだから、ローマ字文が裏にあるのだ。そういう意味では、表面に出ないもののローマ字は未だ生きている訳である。

* 随筆集『触媒』に収められた詩「ROKUGWATU NO HARE (六月の晴れ)」(一九三四年八月)。この詩は寅彦先生も愛着があったようである。邦字表記と併せて付録に示す。

他には随筆集『蛍光板』の随筆「HAKARI NO HARI (秤の針)」(一九三五年一月)があるのみ。随筆「NEKO SANBIKI (猫三四)」(一九三五年六月)がローマ字文の最後になった。

付記：『ローマ字の巻』の山田氏の解説によると、ローマ字運動は一八五九年に神奈川へ来たアメリカの宣教師で医師の HEBURN (ヘップバーンIIヘボン) から始まっている。それで「ヘボン式ローマ字」という。すでに百五十年余に及ぶ歴史がある。

なお、社団法人「日本ローマ字会」が現在も活動していることを知った。ホームページで詳しいことが分かる。